

マスコミ

安倍晋三、ドナルド・トランプ、習近平、ロドリゴ・ドゥテルテ、小池百合子に共通するのは何か。英国のEU離脱劇も加えていいだろう。答えは「ファースト」ではないだろうか。そして入る一つに「メディア」がある。そうした今日のメディア環境を描いた三冊をまずあげよう。



震災後から加速する日本の言論状況の悪化に警鐘を鳴らす。金平もファクラー同様、政権のメディア介入（とくに報道番組）に強く抗議し、「メディアの独立性が脅威にさらされている」も

共通する「メディアファースト」

メディア環境の危機の本質はメディアの内部に

鈴木 雄 雅

「政治権力からの圧力に翻弄されるマス・メディアの有様を厳しく問う『隅井孝雄のメディアウォッチ 3・11から安保法制まで』（リベルタ出版）も併せて読んでおきたい。

大手メディアとは異なる視点から「中央」「地方」という二極構図に帰結するか否かは別として、根底では日本のメディア、社会に

梅本清一「地方紙は地域をつくる 住民のためのジャーナリズム」（七つ森書館）は北日本新聞（富山県）松田修一「新聞今昔」（東奥日報社）は東奥日報（青森県）を中心とした地方紙の歩んだ道といまを描く。猪股征一「増補実践の新聞ジャーナリズム入門」（信濃毎日新聞社、初版は二〇〇六年）もジャーナリズム入門

いた小林恭子「フィナンシャル・タイムズの実力」（洋泉社）を挙げたい。加遺「なども貴重な」伊藤洋一「情報の強者」（新潮新書）は個人が「情報の供給過剰時代」にどう対処するかを優しく説いている。著者が提唱する情報のループ（思考の輪）つくりやよそ者の視点を持つことに耳を傾けるといい。そうすると、炎上参加者はネット利用者の〇・五割という実証分析を出した田中辰雄・山口真一「ネット炎上

ニューヨーク・タイムズ前東京支局長のマーティン・ファクラー『安倍政権にひれ伏す日本のメディア』（双葉社）、TBS「報道特集」キャスターの金平茂紀「抗つニュースキャスター」TV報道現場からの思考（かもがわ出版）、そしてNHK元中国総局長の加藤青延「霸王習近平メディア支配・個人崇拜の命運」（展望社）である。

「危機の本質はメディア内部に」とあると指摘している。

同じように、萎縮、忸怩、自己規制という視点から、メディアを蝕む不都合な真実を暴き出し、メディア復権の手立てを試みようとしたのが上田義樹（北海道新聞出身）『報道の自己規制』（リベルタ出版）でジャーナリズムの在り方を示す秀作である。

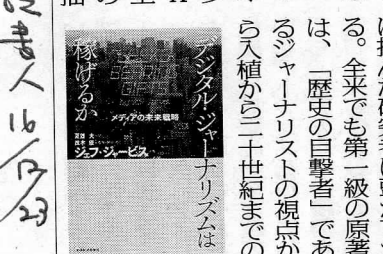
書と企画された地方発の良書と言えろ。

転じて世界に目を向ける知新聞、大西祐賢（京都新聞）、松島佳子（神奈川新聞）『権力に迫る「調査報道」 原発事故、パナマバスティアン・オーバーマヤ、フレデリック・オーバーマイヤー著、畑田多佳子訳「パナマ文書」（KADOKAWA、解説池上彰）と、日本経済新聞社の巨額なメディア買収劇を描

「ファクラーの前作『本当のこと』を伝えない日本の新聞」、二〇一二年も小欄で紹介したが、東日本

「メディアを蝕む不都合な真実」（リベルタ出版）でジャーナリズムの在り方を示す秀作である。

地方紙記者が原発事故、パナマ文書、日米安保を軸に「旬報社」のように、ジャーナリズムの在り方を示す秀作である。



「デジタルジャーナリズムは壊れるか」をめぐって、夏目大誠・茂木崇修「デジタル・ジャーナリズムは壊れるか」メディアの未来戦略」（東洋経済新報社）を読むとき、多少違った読み方になるのではないかと期待する。（すずき・ゆうが氏に上智大学教授・新聞学）

週刊誌 2013/12/23